

【イソジンは最強!! ではありません】

はじめに

皆さんこんにちは！最近一気に暑くなってきましたね。滝の様に汗を流しながら検診をしておりますが一向に痩せません。何故でしょう、、、毎日食べているアイスのせいではないことは確かですが、夏場に痩せない理由が思い当たらないので何かアドバイスを頂きたいと思う今日この頃です。

今回は消毒薬の取り扱いに関して、ちょっと気になる事例があったので注意喚起を含めて軽くコラムを書こうと思います。

身近にある消毒薬

畜産現場では実に多種多様な消毒薬があります。最も身近な消毒薬はやはり搾乳時に使うディッピングでしょうか。他にも踏み込み消毒槽や、牛舎に噴霧・散布する消毒薬など沢山ありますね！実は2019年5月号のM情報で別の獣医師が細かく説明してくれているので、お時間あるときにこちらも是非読んでみてください！

軽く消毒薬についてまとめるとページ右の様になります。

そして、これら消毒薬には下記の要因が影響します

- ・濃度
- ・温度
- ・有機物の有無
- ・PH

ここで特に注目したいのが、**有機物の有無**です。消毒の基本は**水洗7：消毒3**といわれるように、どんな消毒薬でも有機物（糞便や血液、埃など）が多い場合**効果を発揮できません**。

そして更に忘れてはならないのが、**消毒薬の中でも菌やウイルスは繁殖できる**ということです。

右ページの様消毒薬には得意不得意がありますが、これはあくまで上記の要因を排除した状態の作用です。有機物が多く存在する場合、消毒薬は効果を発揮できないどころか、**菌の温床になる可能性**が大いにあります

	一般細菌	ヨーネ菌	サルモネラ	芽胞菌	コクシジウム	真菌
逆性石鹼 (パコマ・アストップ等)	◎	×	◎	×	×	△
塩素系 (クレンテ・ビルコン等)	◎	◎	◎	◎	×	○
ヨード系 (イソジン・ヨーチン等)	◎	○	◎	○	×	○
アルデヒド系 (グルタクリン等)	◎	◎	◎	◎	×	◎
オルソ剤 (トライキル等)	◎	△	◎	×	◎	○
消石灰	◎	○	◎	△	○	○

◎：最適 ○：有効 △：一部有効 ×：無効



今回あった事例

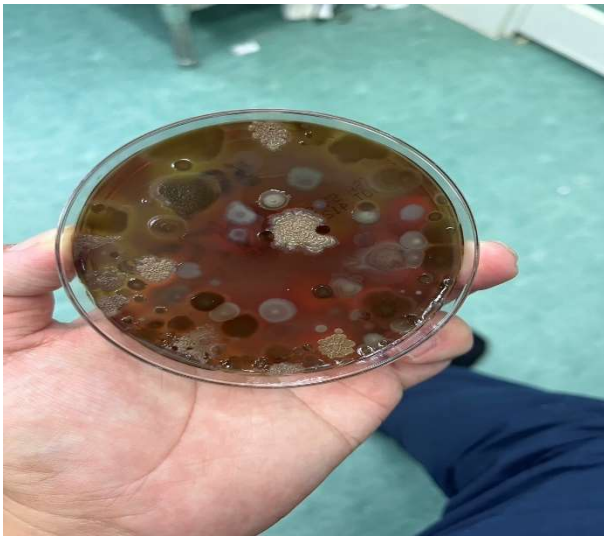
それでは具体的に、今回であった消毒薬の汚染事例を紹介します。



これはとある農家さんで子牛の臍消毒用に置いてあったディッピング容器です（中身はイソジン液）

この農場では時折臍帯炎が多発することがあり、分娩場所やその後の臍帯消毒などを見直すことがありました。最近もすこし臍帯が腫れる子牛が目立ってきている状況です。

ディッピング容器はひどく汚れているようには見えませんが、少しゴミが浮いていることと、中にイソジンが入ればなしになっている状態をよく見るので、少し気になって上のディップ部分に出ているイソジン液だけを掬って培養してみました。



なんと！かなりの量の菌がイソジン液中にいました。

誤解の無い様に先に言うておきますが、この農場で起こる臍帯炎すべてがこのディッピング容器によるものだと僕は思いません。理由としては、臍帯炎の原因は分娩環境など「分娩直後の状況」が大きなウェイトを占めているからです。

ただ、このディッピング容器+イソジン液の汚染が臍帯炎のいくつかある原因の一つ、もしくはすでに起こっている臍帯炎を悪化させる要因になっている可能性はあると思います。

搾乳時に使用するディッピング容器は、使用頻度も高く、多くの場合1日に1回以上は内容液補充のため軽く水洗いはする方が多いと思います。しかし臍帯消毒用のディッピング容器はたまにしか洗わないという方も多いのではないのでしょうか？

後日談ですが、この農場は農家さんも従業員さんも非常にフットワークが軽い方たちで、新しいルールやルーティンを即実施して下さるので、今後子牛の臍帯消毒にはディッピングを用いず、紙コップにイソジン液を入れ、都度使い捨てる形でやって頂くことにしました。

ディッピング容器で消毒するのもいいですが、あえて使い捨て容器を使用することで個人差や衛生概念の差がなくなるため、間違いなく清潔な消毒薬の取り扱いができると思います。

これから夏本番を迎えますが、サイレージだけでなく、あらゆる場所で菌が繁殖しやすい、まさに菌のゴールデンタイムが始まります。消毒薬は最強！とは思わずに、消毒薬を入れる容器・扱う人の手など「消毒薬が触れる場所の消毒」をイメージして頂くと夏の影響を少し緩和できるかもしれません！



Total Herd Management Service